月刊 DRF　2015 年 11 月号　No.70 November, 2015　掲載

今そこにあるオープンアクセス　Clear and present Open Access
第 15 回　ハゲタカ OA 出版を防ぐための提案
Proposals to prevent predatory OA publishing

首都大学東京学術情報基盤センター　栗山正光

先月号では佐藤翔さんがハゲタカ OA 出版の拡大に関する研究論文（正式に『BMC メディスン』という OA 誌で発表された）を紹介された。今回はそれを勝手に受け継いで、若干の補足とその後の議論の紹介を行いたい。

そもそもの始まりはリチャード・ポインダーが、いつものインタビューではなく、自身の意見をブログに掲載したことである。彼はハゲタカ出版の拡大を問題視し、例のジェフリー・ビール [i]のブラックリストに挙げられている雑誌の編集委員名簿をデータベース化してはどうかと提案している。このデータベースは、研究者が勝手に自分の名前が使われていないかチェックしたり、その雑誌が本当にハゲタカなのかどうかの判断材料にしたりなど、様々な用途に使えるのではないかと言う。

これに対して、ハゲタカ出版がゴールド OA 全体に占める割合は実際にどのくらいなのかという疑問が出され、一つの参考として、上記論文が著者ビョーク自身（共著で第一著者はシェンという大学院生）から紹介されたわけである。この論文もビールのリストをデータ収集の出発点にしている。そのせい（ビールには批判も多い）かどうか、ハゲタカ出版の脅威が誇張され過ぎているという違和感を拭い去るところまでは行かなかったようである。

一方、ブラックリストの作成に時間を費やすより、研究者の教育に力を入れるべきだという意見も出た。この方向での試みとして紹介されたのが、「思考せよ。チェックせよ。投稿せよ(Think. Check. Submit.)」である。これは論文の投稿先を選ぶ際の注意事項を 3 段階に分けて示した簡便なチェックリストで、特に若手の研究者に向けたものらしいのだが、正直、これだけ？という感じである。ALPSP を始めとする出版、図書館関係の団体が協調して行うキャンペーンとのことだが、効果のほどは今後の検証に待つしかない。

もう一つ、「責任ある出版資源のための連合(Coalition for Responsible Publication Resources (CRPR))」という構想への参加も呼びかけられた。こちらは出版業界の任意加盟の組織で、基準を満たした会員にバッジ（お墨付き？）を与えるというものである。DOAJ と同じようなホワイトリスト的アプローチと言える。ドナルド・サミュラックという人が、ネイチャー・グループのヘイゼル・ニュートン、トムソン・ロイターのジョシュ・ダール、そしてジェフリー・ビールと共に、ISMTE という編集者の国際会議で発表した。

ちなみに、ビールはこの会議で基調講演も行っている。メーリングリストでは、CRPR もビールの個人的評価が基本になってしまうのではないかという疑惑を持たれ、サミュラックがそうではないと弁明する一幕もあった。こうした出版関係者の活動を業界の自浄作用と見るのはナイーブに過ぎるのかもしれない。

---

[i] Jeffrey Beall.　以前の本連載では Beall を「ベル」と表記していたが、「ビール」の方が原音に近いことがわかったので訂正させていただく。